

外国語（英語）学習に対する学生の不安に関する研究(2)

北 條 礼 子*

(平成4年10月29日受理)

要 旨

1991年4月に私立大学1年生計76名を対象に、外国語（英語）学習に対して学生が感じている不安と教師の態度と不安の関係に関する調査を実施した。そしてこの結果を、本学1年生50名を対象とした調査結果（北條，1992）と比較した。その結果、今回の調査対象である学生も授業中クラスメート全員の前で英語を話すことに強い不安を感じることをはじめ、同じ不安傾向を示すことが明らかになった。また、教師が学生の間違いを大げさな態度で訂正しなければ、不安感を感じないですむ、という点で完全に一致していた。しかし、学生が不安を覚えずにすむ教師像において若干の違いがみられた。

KEY WORDS

不安 anxiety

スピーキング speaking

英語科教育 English education

語学教育 language education

1. 研究の背景

これまで、外国語（英語）学習における不安に関する体系的な研究は国内では必ずしも多いとはいえない。そのため、外国語（英語）学習に対して日本人学生がどのような不安をどの程度感じるのかについての研究を行なうにあたり、学生の抱く不安を具体的に知ることがその第一歩であると考えられた。そこで、1991年4月に本学1年生50名を対象に不安に関する第1回の調査を実施した（北條，1992）。この調査では、Young（1990）の先行研究の結果を基に、特にスピーキングと不安との関係を中心に検討し、また学生の不安を減ずるのに効果的な教師の態度、性格等も検討した。

まず英語の授業において学生が感じている不安についてであるが、第1回の研究結果（北條，1992）からわかったことは、第一に、授業中皆の前で英語で話したり、準備してきた英会話を授業中に全員の前で発表したり、英語で意見を発表したり、寸劇を演じることに對して、学生は強い不安感を抱く一方、3～4人のグループで練習したり、教師の後について繰り返したり、グループにわかれてゲームをし勝敗を競ったり、英文を黙読したり、全員で英文を音読したりするという、個人的に目立たない学習活動に対してあまり不安を感じていないことであった。つまり、学生は「英語で話す」ということに対して不安を感じるのであり、たとえあらかじめ話す内容を準備してきた場合であっても、あるいは強制的ではなく自発的に話す場合であって

* 言語系教育講座

も、さらに学生同志2人1組という形態で英語で質問し合う場合であっても、学生が強い不安を感じていることがわかった。この結果は、クラスメートの注目を浴びた状態で、あるいはクラスメート全員の前で、学習中の言語を話すという学習活動に対して学生が最も強い不安を感じたという、Young (1990)の研究結果に一致するものであった。しかし、Youngの調査では、前もって話す内容について準備をしていれば学生の不安感は低くなるという結果が得られたが、前回の研究においては、準備の如何にかかわらず不安感は強く残っているという点が異なっていた。また、学生が次に不安を感じているのは「英語を書く」という学習活動であった。授業中であれ、家で前もって書いてくる場合であれ、英語を書くということに対して学生はかなり強い不安を感じていた。さらに、学生は、2人1組になって短い英会話を考えて作ったり、教科書の練習問題を解くことにもかなりの不安感を抱いていた。

以上、英語を話したり書いたりするという生産的な学習活動が学生を不安な状態にすることが明らかになった。ただし、生産的な学習活動のうち、グループに別れてゲームをし勝敗を競うことに対して学生は不安を感じていないのが、特徴的であった。この理由として、グループ内での活動であるため、個人的に他学生の注目を浴びる心配がないということが考えられる。

また、英語の授業中教師が学生の誤ちを訂正する際の態度と学生が感じる不安の関係についてであるが、同調査結果より、学生が不安を感じるのは、教師が学生の間違いを訂正する際に、教師が学生が愚かであると思わせる態度を取ったり、厳しい態度で間違いを訂正したり、大きな反応を示す場合であることが明らかになった。また、教師が学生が間違ってもそれはたいしたことではないという態度を取ったり、教師が、間違いはだれでも犯すものであるという態度を取れば、学生はそれほど不安を覚えずに済むこともわかった。この結果は常識的なものであり、容易に納得できる結果であった。

最後に、学生が授業で感じる不安と教師の態度、性格との関係についてであるが、同調査結果から、教師の態度・性格が親しみやすく理解があれば学生は不安をあまり感じないですむが、授業中英語で発言するように励ましたりほめられたりすると不安を感じることが明らかになった。Young (1991)の結果では、授業中英語で発言するように励まされたりほめられたりすることを肯定的に捉えていたが、日本人学生は教師に励まされると喜ぶというよりむしろ不安に連がり、とにかく英語を話すことに抵抗感を抱いていると推測された。また、これまで、あまり教師にほめられる経験がなかったためかどうかは明らかではないが、教師にほめられると不安感を抱いてしまっていた。

現在まで、日本人大学生が外国語(英語)の授業に対して感じる不安に関する体系的な研究は少ない。また、これまで、他大学との比較を試みている研究結果はほとんどない。今回の研究では、本学とは、私学、所在地(東京)、大規模校、専攻(政治経済)等の点で性格の異なる大学からの資料が得られたので、両大学間の学生が感ずる不安の違いがみられるのかどうかを検討してみることにした。

2. 研究の目的

本研究では、英語の授業中に日本人大学1年生が感じる不安を学生の観点から明らかにすることを第1の目的としている。また、教師がどのように学生に接すれば、学生が外国語(英語)

の授業で感じる不安が少しでも低くなるのかを学生の観点から調べることを第2, 第3の目的としている。さらに, 以上の結果を本学の学生から得られた結果(北條, 1992)と比較することが第4の目的である。

つまり, 本研究の目的は,

- ①学生はどのような学習活動に対してどの程度不安を感じるのか,
 - ②学生は教師が学生の誤りをどのように訂正すると不安を感じるのか,
 - ③学生が不安をなるべく感じずにすむには, 教師がどのような性格であるのが望ましいのか, あるいはどのような態度で学生に接すればよいのか,
 - ④①～③の結果について, 大学間による差はみられるのか
- の4点を明らかにすることである。

3. 研究の方法

3.1 被験者：私立W大学1年次生1クラス76名

3.2 測定具：Young (1990) が開発したアンケートを基に, 筆者が日本人学習者が被験者であることを念頭に若干の修正を加えたアンケート。このアンケートは以下の4部から成っている。

1部：被験者のこれまでの英語学習状況や, 海外生活経験について質問する項目。

2部：英語の授業において学生が感ずる不安に関する20項目。

3部：英語の授業中教師が学生の誤りを訂正する際の態度と学生が感ずる不安の関係に関する5項目。

4部：学生が授業で感ずる不安と教師の態度, 性格との関係に関する13項目
なお, 3部と4部は, Young (1990) が自由回答形式で集めた結果を基に5段階評定の形式に改めたものを用いた。

3.3 実験実施時期：1991年4月

3.4 手続き：約15分の実施時間で, 集団で調査を行なった。記入は匿名として, 2部から4部の内容に関する記述を提示した。回答は, 「1：全く不安を感じない, 2：あまり不安を感じない, 3：どちらでもない, 4：やや不安を感じる, 5：非常に不安を感じる」の5段階であり, 1点から5点までの得点化を行なって, 項目ごとに集計した。

3.5 分析方法：分散分析, ウィルコクソンの符号付順位和検定

4. 研究の結果

4.1 アンケートの第1部の結果：「海外経験あり」と回答した学生を調査対象から除外した。

4.2 第2部：英語の授業において学生が感ずる不安に関する20項目について

4.2.1. 平均値・標準偏差

表1：英語の授業において学生が感ずる不安に関する20項目の平均値と標準偏差

順位	平均値	標準偏差
① 授業中、皆の前で英語で話す	4.23	0.97
② 授業中、英語で意見を发表或し寸劇を演じる	4.05	1.00
③ 準備してきた英会話を、授業中に全員の前で発表する	4.03	1.08
④ ^a 教師の言ったことを一人だけで（全員ででなく）繰り返す	3.76	1.10
④ ^b 授業中、皆の前で、与えられた状況での役割を自発的に演ずる	3.76	1.15
⑥ 英語による質問を聞いて、その答えを英語で書く	3.68	1.04
⑦ 英語によるディスカッションに自主的に（強制的義務的にでなく）参加する	3.61	1.17
⑧ 答えを黒板に書く	3.36	1.06
⑨ 教師の研究室で個人的に教師と話す	3.34	1.12
⑩ 2人1組になって、短い英会話を考えて作る	3.18	1.05
⑪ 2人1組になってお互いに英語で質問し合う	3.16	1.00
⑫ 授業中、英作文を書く	3.11	1.13
⑬ 家で英作文を書いている	2.79	1.06
⑭ 教科書の練習問題をする	2.75	0.99
⑮ 3～4人のグループで練習する	2.64	1.12
⑯ 授業中、グループに別れてゲームをし勝敗を競う	2.61	1.11
⑰ 新聞や写真を参考にしながら英語の勉強をする	2.59	1.10
⑱ 教師の後について繰り返す	2.36	0.98
⑲ 授業中、英文を黙読する	1.93	1.09
⑳ 授業中、英文を音読する（全員で）	1.92	1.09

表2：LSD法による多重比較の結果（20項目）

1																			
2	ns																		
3	ns	ns																	
4	*	*	ns																
5	*	*	ns	ns															
6	*	*	*	ns	ns														
7	*	*	*	ns	ns	ns													
8	*	*	*	*	*	*	ns												
9	*	*	*	*	*	*	ns	ns											
10	*	*	*	*	*	*	*	ns	ns										
11	*	*	*	*	*	*	*	ns	ns	ns									
12	*	*	*	*	*	*	*	ns	ns	ns	ns								
13	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*							
14	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	ns					
15	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	ns	ns				
16	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	ns	ns	ns			
17	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	ns	ns	ns	ns		
18	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	ns	ns	
19	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
20	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	ns
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19

* p<.05

アンケートの第2部である、英語の授業において学生が感ずる不安に関する20項目に対する得点を集計し、平均値と標準偏差を求め、平均値の高い順に項目を整理し直し、考察にあわせて調整したものが表1である。

4.2.2. 分散分析の検定結果（20項目）

英語の授業において学生が感ずる不安に関する20項目の得点について、分散分析の結果、まず $F(75, 1425) = 45.62$ であり、1%レベルで有意であった。LSD法による多重比較の結果は表2のとおりである ($MSe = 0.78$, 5%水準)。なお、表2は理解しやすいように、全項目を得点の高い順（学生の感じる不安が強い順）に並べているが、表2の項目番号と内容は表1に対応している。

表1, 2より、ここで取り上げた20項目は3箇所間に5%レベルで有意差がみられた。つまり、①の「授業中、皆の前で英語で話す」から③の「準備してきた英会話を、授業中に全員の前で発表する」の3項目と、それに続く④^aの「教師の言ったことを一人だけで全員ででなく）繰り返す」、④^b「授業中、皆の前で、与えられた状況での役割を自発的に演ずる」から⑫の「授業中、英作文を書く」の9項目の間、さらに以上の9項目と⑬の教室外、つまり自宅等の「家で英作文を書いてくる」から⑱の「教師の後について繰り返す」までの6項目の間、最後に以上の6項目と⑲の「授業中、英文を黙読する」、⑳の「授業中、英文を音読する（全員で）」ま

表3：英語の授業において学生が感ずる不安に関する20項目の大学ごとの順位
(順位の破線は、破線の上下にある項目間に有意差が存在していることを示す)

順位	(私立W大学)	本学
①	授業中、皆の前で英語で話す	①
②	授業中、英語で意見を発表したり寸劇を演じる	③
③	準備してきた英会話を、授業中に全員の前で発表する	②
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>		
④ ^a	教師の言ったことを1人だけで（全員ででなく）繰り返す	⑥
④ ^b	授業中、皆の前で、与えられた状況での役割を自発的に演ずる	④
⑥	英語による質問を聞いて、その答えを英語で書く	⑤
⑦	英語によるディスカッションに自主的に（強制的義務的にでなく）参加する	⑧
⑧	答えを黒板に書く	⑨
⑨	教師の研究室で個人的に教師と話す	⑭
⑩	2人1組になって、短い英会話を考えて作る	⑫
⑪	2人1組になってお互いに英語で質問し合う	⑨
⑫	授業中、英作文を書く	⑦
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>		
⑬	家で英作文を書いてくる	⑪
⑭	教科書の練習問題をする	⑬
⑮	3～4人のグループで練習する	⑯
⑯	授業中、グループに別れてゲームをし勝敗を競う	⑱
⑰	新聞や写真を参考にしながら英語の勉強する	⑮
⑱	教師の後について繰り返す	⑰
<hr style="border-top: 1px dashed black;"/>		
⑲	授業中、英文を黙読する	⑲
⑳	授業中、英文を音読する（全員で）	⑳

での2項目間であった。

4.2.3. 大学間の比較

表3の結果を基に、ウイルコクソンの符号付順位和検定を行なったが、正規近似値が0.58で有意確率は $p > 0.10$ であり、大学間の順位の差は有意でなかった。つまり、調査の対象としている学習活動に対して、大学が異なっても同じ様な傾向で不安を覚えていることがわかった。

4.3. 第3部：英語の授業中教師が学生の誤ちを訂正する際の態度と学生が感じる不安の関係に関する5項目。

4.3.1. 平均値・標準偏差

アンケートの第3部である、英語の授業中教師は学生の誤ちを訂正する際に態度と学生が感じる不安の関係に関する5項目に対する得点を集計し、平均値と標準偏差を求め、平均値の高い順に項目を整理し直したものが表4である。

4.3.2. 分散分析の結果（5項目）

英語の授業中教師が学生の誤ちを訂正する際の態度と学生が感じる不安の関係に関する5項目の得点について、一元の分散分析を行なった結果、まず $F(4) = 79.90$ であり、1%レベルで有意であった。LSD法を用いた多重比較の結果は表4のとおりである。 $(MSe = 0.85, 5\% \text{水準})$ 。なお、表4は理解がしやすいように、全項目の得点の高い順(学生の感じる不安が強い順)に並べているが、表5の項目番号と内容は表4に対応している。

表4、5をみると、項目①の「あなたが間違うと、教師はあなたが愚かであると思わせる態度を取る」、項目②の「教師が厳しい態度で間違いを訂正する」、項目③の「教師が、学生の間違いに対して大げさな反応を示す」の3項目と、項目④の「教師が、学生が間違ってもそれはたいしたことではない、という態度を取る

表4：英語の授業中教師が学生の誤ちを訂正する際の態度と学生が感じる不安の関係に関する5項目の平均値と標準偏差

順位		平均値	標準偏差
①	あなたが間違うと、教師はあなたが愚かであると思わせる態度を取る	4.34	0.99
②	教師が厳しい態度で間違いを訂正する	4.03	1.04
③	教師が、学生の間違いに対して大げさな反応を示す	3.88	1.03
④	教師が、学生が間違ってもそれはたいしたことではない、という態度を取る	2.43	1.04
⑤	教師が、間違いはだれでも犯すものである、という態度を取る	2.33	1.03

表5：LSD法による多重比較の結果（5項目）

2	*			
3	*	ns		* $p < .05$
4	*	*	*	
5	*	*	*	ns
	1	2	3	4

はたいしたことではない、という態度を取る」と項目⑤の「教師が間違いはだれでも犯すものである、という態度を取る」の2項目間に有意差があり、項目④、⑤の2項目においてより、項目①、②、③の3項目において、学生の不安が有意に高まることがわかった。

4.3.3. 大学間の比較

表6の結果をみると、英語の授業中教師が学生の誤ちを訂正する際の態度について感ずる不安に関して、両大学の学生は5つの調査項目に全く同じ順位づけをしていた。つまり、大学が異なっても全く同様に不安を感じていることがわかった。

表6：英語の授業中教師が学生の誤ちを訂正する際の態度と学生が感じる不安の関係に関する5項目の大学ごとの順位（順位の破線は、破線の上下にある項目間に有意差が存在していることを示す）

順位	（私立W大学）	本学
①	あなたが間違うと、教師はあなたが愚かであると思わせる態度を取る	①
②	教師が厳しい態度で間違いを訂正する	②
③	教師が、学生の間違いに対して大きな反応を示す	③
④	教師が、学生が間違ってもそれはたいしたことではない、という態度を取る	④
⑤	教師が、間違いはだれでも犯すものである、という態度を取る	⑤

4.4. 4部：学生が感じる不安と教師の態度、性格との関係に関する13項目について

4.4.1. 平均値・標準偏差

アンケートの第4部である、学生が授業で感じる不安と教師の態度、性格との関係に関する13項目に対する得点を集計し、平均値と標準偏差を求め、平均値の高い順に項目を整理し直したものが表7である。

表7：学生が授業で感じる不安と教師の態度、性格との関係に関する13項目の平均値と標準偏差

順位		平均値	標準偏差
①	（授業中）学生に英語で発言するように励ます	2.46	1.03
②	忍耐強い	2.30	1.04
③	学生をほめる	2.25	1.05
④	面倒みのよい	1.99	0.94
⑤	教材について十分説明する	1.92	0.98
⑥	いつも笑顔で学生に接する	1.88	0.99
⑦	（教師の態度が）緊張しないでリラックスしている	1.79	0.96
⑧	堅苦しくないリラックスした雰囲気を作る	1.78	0.98
⑨	助けてくれる	1.76	0.92
⑩	ユーモアのセンスに富む	1.74	0.96
⑪ ^a	理解のある	1.71	0.86
⑪ ^b	学生を緊張させない	1.71	0.86
⑬	親しみやすい	1.66	0.91

4.4.2. 分散分析の結果 (13項目)

学生が授業で感じる不安と教師の態度、性格との関係に関する13項目の得点について、分散分析の結果、まず $F(75,900) = 16.18$ であり、1%レベルで有意であった。LSD法による多重比較の結果は表8のとおりである。(MSe=0.32, 5%水準)。表8は理解しやすくするため、全項目の得点の高い順(学生の感じる不安が強い順)に並べているが、表8の項目番号と内容は表7に対応している。

表7, 8をみると、項目③と項目④の間に有意差がみられる。つまり、項目①の「(授業中)学生に英語で発言するように励ます」、項目②の「忍耐強い」、項目③の「学生をほめる」がそれ以外の項目に比べて、有意に学生の不安を高めることが明らかになった。

表8 : LSD法による多重比較の結果 (13項目)

2	ns													
3	*	ns												
4	*	*	*											
5	*	*	*	ns										
6	*	*	*	ns	ns									
7	*	*	*	*	ns	ns								
8	*	*	*	*	ns	ns	ns							
9	*	*	*	*	ns	ns	ns	ns						
10	*	*	*	*	*	ns	ns	ns	ns					
11 ^a	*	*	*	*	*	ns	ns	ns	ns	ns				
11 ^b	*	*	*	*	*	ns	ns	ns	ns	ns	ns			
13	*	*	*	*	*	*	ns	ns	ns	ns	ns	ns		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11 ^a	11 ^b		

* p<.05

表9 : 学生が授業で感じる不安と教師の態度、性格との関係に関する13項目の大学ごとの順位 (順位の破線は、破線の上下にある項目間に有意差が存在していることを示す)

順位	大学
①	(授業中) 学生に英語で発言するように励ます
②	忍耐強い
③	学生をほめる

④	面倒みのよい
⑤	教材について十分説明する
⑥	いつも笑顔で学生に接する
⑦	(教師の態度が) 緊張しないでリラックスしている
⑧	堅苦しくないリラックスした雰囲気を作る
⑨	助けてくれる
⑩	ユーモアのセンスに富む
⑪ ^a	理解のある
⑪ ^b	学生を緊張させない
⑬	親しみやすい

4.4.3. 大学間の比較

表9の結果を基に、ウイルコクソンの符号付順位和検定を行なったが、正規近似値が2.46で有意確率は $p < 0.05$ であり、大学間の順位の差は有意であった。つまり、学生が授業で感じる不安と教師の態度、性格との関係に関して2大学間の学生が異なる傾向を示していることがわかった。

5. 研究の考察

5.1. 英語の授業において学生が感ずる不安について

研究の結果から、学生はまず、授業中皆の前で英語で話したり、準備してきた英会話を授業中に全員の前で発表したり、英語で意見を発表したり寸劇を演じることに對して、最も強い不安を覚えることがわかった。学生が最も不安を感ずる以上の3項目とも「英語で話す」という活動であり、個人的にピアグループの注目を浴びているという共通点がみられる。

次に学生の不安感が強い学習活動は、教師の言ったことを一人だけで繰り返したり、授業中皆の前で与えられた状況での役割を自発的に演じたり、英語による質問を聞いてその答えを英語で書いたり、英語によるディスカッションに自主的に参加したり、答えを黒板に書いたり、授業中英作文を書いたりすることであった。また、2人1組になって短い英会話を考えて作ったり、お互いに英語で質問し合ったりすることも学生にとって同程度の不安を感ずる学習活動であり、教師の研究室で個人的に話すことに対しても同様の不安を感じている。以上の9項目をみると、項目④^a、④^b、⑦は「英語で話す」という点で共通していた。しかし英語で話す場合でも、それがたとえ個人的に目立つ状況であっても、教師のいうことを一人で繰り返したり、またはピアグループを前にした状況であっても、その発言が強制的ではなく自発的な意思に基づく場合である。集団の注目を浴びる度合いが低くなるので、学生の不安感もそれだけ低くなるのであろう。また、⑥、⑦、⑫は共通に「書く」という活動である。さらに、2人1組での学習活動に対して、それが短い英会話を作る場合であっても、あるいはお互いに英語で質問し合う場合でも、かなりの不安を感じている。自分の英語力が相手にどう評価されるのかが気になるのであろうか。現在、コミュニケーション・コンピタンスが重視されているので、英語の授業中にこのようなペアワークは比較的好く行なわれていると推測されるが、学生にとってこのように情緒面でかなりの負担になっていることは、教師側が一考すべき問題であらう。また、教師の研究室で個人的に教師と話すことについて、同程度の不安を感じているが、これは調査の対象となった大学が大規模校でもあり、教師と個人的に話す機会がそれほど多くないであろうと推察され、このような状況もその原因になっているのであろう。

さらに、以上の項目に比べて、学生の不安感が低くなっている項目をみると、家で英文を書いたり、教科書の練習問題をしたり、3～4人のグループで練習したり、グループにわかれてゲームをし勝敗を競ったり、新聞や写真を参考にしながら英語の勉強をすることであった。学生は英語を書くことに対して、家で書いてくるのであれば授業中に英語を書く場合より不安を感じないですむというわけである。これは英語を書くのに家で十分に時間をかけて準備することができることや、集団内での精神的プレッシャーがないのであるから、納得できる結果である。この結果はYoung (1990)の結果とも一致をみている。また、ここに区分された項目は、

個人的に注目されずにすむ学習活動である点で共通していた。

最後に、英文を黙読したり、全員で英文を音読したりするという、個人の行動が特に目立たない学習活動を行なう際に最も不安を感じないで済むことがわかった。これらは、集団内に完全に埋没して行なえる活動であることから、不安感が最も低いのも当然であろう。

ここで、改めて両大学の調査結果を比較してみたが、全体として不安の項目の順位に差はなかった。つまり、両大学の学生にとって最も強く不安を感じるのは、英語を「話す」あるいは「書く」という生産的な学習活動であった。ただし、W大学の学生はどの項目に不安を感じるのかをより明らかに順位づけをしていた。具体的にいうと、英語を「話す」>「書く」、「強制的」>「自主的」、「集団に注目される」>「集団に埋没」という特色が明らかになった。

以上より、大学の性格が異なっていたとしても、英語学習の諸活動に対する学生の不安感には差はみられないことが明らかになった。今回の被験者が所属しているのは、都会にある私立大規模校であり、全国でも偏差値の最も高い学科の一つである。本学とは、種々の面で大分性格が異なる被験者であったが、不安という情意面での一致をみた。このことは、今後の外国語教育をより効果的なものにしていくのに必要な研究を進めていくうえで、有用な参考資料となろう。また、同時に日本における大学レベルの英語教育はいかにあるべきか、という問題提起につながるであろう。

5.2. 英語の授業中教師が学生の誤ちを訂正する際の態度と学生が感じる不安の関係について

研究の結果から、教師が学生の間違いを訂正する場合、教師が学生が愚かであると思わせる態度を取ったり、厳しい態度で間違いを訂正したり、大げさな反応を示すと、学生は強い不安を感じることが明らかになった。また、教師が学生が間違ってもそれはたいしたことではないという態度を取ったり、教師が間違いはだれでも犯すものであるという態度を取れば、学生の不安感が低くなることも明らかになった。この結果は本学の学生から得られた結果と完全に一致するものであったが、教育にかかわる常識の観点からも十分にうなづける結果であろう。

5.3. 学生が授業で感じる不安と教師の態度、性格との関係について

研究の結果から、教師の態度・性格について、教師が授業中英語で発言するように励ましたり、忍耐強かったり、またほめられたりすると不安を感じることが明らかになった。

Young (1990) の結果では、授業中英語で発言するように励まされたりほめられたりすることを肯定的に捉らえていたが、日本人学生は教師に励まされると肯定的どころか、かえって強く不安を覚えている。また学生は、教師が忍耐強い態度を示すと不安を抱き、教師にほめられるとそれが不安に連がっている。これまでそのような経験が乏しいのかどうかについて明らかではないが、教師が忍耐強く学生に接したり、ほめたりすると、学生はかえって不安感を抱いてしまっている。今回の調査は「英語」と教科を限定しているが、他教科においては、学生に不安を抱かせない教師像について同様の結果が得られるのか否か、関心の高まる場所である。

ここで、両大学の結果を比較してみると、本学の学生は、「(授業中) 学生に英語で発言するように励ます」教師や「学生をほめる」教師に強い不安を感じていた反面、「親しみやすい」、「理解のある」教師に接すると不安を感じないですむ傾向を示していた。これに対して W大学の学生は強い不安を感じる教師像として本学の学生があげた2項目は共通していたが、さらに「忍耐強い」という項目も選択していた。実際、本学の学生による順位づけをみてもこの項目

は第3位であったが、W大学の学生の方が教師の忍耐強さにより不安を覚えていたわけである。また、W大学の学生はその他の項目について、特に好ましい教師の性格・態度とは捉らえていなかった。都会の学生でもあり、教師に対する態度が本学よりクールなのではないだろうか。また本学に比べてW大学は大規模校であるので、教師との触合いの機会が少なく、教師に対する関心もより低いのかもしれない。

6. 今後の課題

今回の研究は、日本人大学生が感じる外国語（英語）の授業に対して感じる不安に関する体系的な研究を目指し、その第2回として行なったものである。今回は大学1年生76名を対象とし、第1回の研究結果との比較も行なった。今後、今回の結果を参考にした上で、調査の対象も大学生1年生ばかりでなく上級生をも対象とし、また可能であれば海外留学経験者との比較も行ない、研究の枠を拡大することを予定している。

引用・参考文献

- 東 洋他編 (1988) 「現代教育評価事典」 金子書房
- Birkmair, Emma M. (1973) "Research on Teaching Foreign Languages," *Second Handbook of Research on Teaching* (Ed. by R. M. W. Travers) Rand McNally & Company, 1280-1302.
- Carroll, John B. (1963) "Research on Teaching Foreign Languages," *Handbook of Research on Teaching* (Ed. by N. L. Gage) Rand McNally & Company, 1060-1100.
- Chastin, Kenneth (1975) "Affective and Ability Factors in Second-Language Acquisition," *Language Learning*, Vol. 25, No. 1, 153-161.
- Ely, Christopher M. (1986) "An Analysis of Discomfort, Risktaking, Sociability, and Motivation in the L2 Classroom," *Language Learning*, Vol. 36, No. 1, 1-25.
- Foss, Karen A. and A. C. Reitzel (1988) "A Relational Model for Managing Second Language Anxiety," *TESOL Quarterly*, Vol. 22, No. 3, 437-454.
- Gardner, Robert C. (1991) "Attitudes and Motivation in Second Language Learning," *Bilingualism, Multiculturalism, and Second Language Learning* (Ed. by Allan G. Reynolds) Lawrence Erlbaum Associates, Publishers, 43-63.
- 北條礼子 (1992) 「外国語（英語）学習に対する学生の不安に関する研究(1)」上越教育大学研究紀要 第12巻第1号 53～64頁
- Kieinmann, Howard H. (1977) "Avoidance Behavior in Adult Second Language Acquisition," *Language Learning*, Vol. 27, No. 1, 93-107.
- MacIntyre, Peter D. and R. C. Gardner (1989) "Anxiety and Second Language Learning: Toward a Theoretical Clarification," *Language Learning*, Vol. 38, No. 2, 251-275.
- _____ (1991a) "Investigating Language Class Anxiety Using the Focused Essay Technique," *Modern Language Journal*, Vol. 75, No. iii,

297-304.

- _____ (1991b) "Methods and Results in the Study of Anxiety and Language Learning: A Review of the Literature," *Language Learning*, Vol. 41, No. 1, 85-117.
- _____ (1991c) "Language Anxiety: Its Relationship to Other Anxieties and to Processing in Native and Second Language," *Language Learning*, Vol. 41, No. 2, 513-534.
- Mayerhof, Elfi (1992) "Communication Dynamics as Test-Anxiety Therapy," *Forum*, Vol. 30, No. 1, 45-47.
- McCoy, Ineborg R. (1979) "Means to Overcome the Anxieties of Second Language Learners," *Foreign Language Annals*, Vol. 12, No. 3, 185-189.
- Morwitz, Elaine K. (1985) "Using Student Beliefs about Language Learning and Teaching in the Foreign Methods Course," *Foreign Language Annals*, Vol. 18, No. 4, 333-340.
- _____, M. B. Horwitz and J. Cope (1986) "The Foreign Language Classroom Anxiety," *Modern Language Journal*, Vol. 70, No. ii, 125-132.
- _____ (1988) "Beliefs about Language Learning of Beginning University Foreign Language Students," *Modern Language Journal*, Vol. 72, No. iii, 283-294.
- Scovel, Thomas (1978) "The Effect of Affect on Foreign Language Learning: A Review of the Anxiety Research," *Language Learning*, Vol. 28, No. 1, 129-142.
- _____ (1986) "The Relationship between Anxiety and Foreign Language Oral Proficiency Ratings," *Foreign Language Annals*, Vol. 19, No. 5, 439-445.
- Steinberg, Faith S. and E. K. Horwitz (1986) "The Effect of Induced Anxiety on the Denotative and Interpretive Content of Second Language Speech," *TESOL Quarterly*, Vol. 20, No. 1, 131-136.
- Young, Dolly J. (1990) "An Investigation of Students' Perspectives on Anxiety and Speaking," *Foreign Language Annals*, Vol. 23, No. 6, 539-553.
- _____ (1991) "Creating a Low-Anxiety Classroom Environment: What Does Language Anxiety Research Suggest?" *Modern Language Journal*, Vol. 75, No. iv, 426-437.

A Study of Students' Anxiety over Classroom English (2)

Reiko HOJO*

ABSTRACT

The purposes of this second study were 1) to find out how much anxiety students have in English classes; 2) how teachers can correct students' errors so that students feel less anxious; 3) what characteristics and attitudes students expect teachers to have so that students feel less anxious and finally, and most importantly, 4) to compare the results of this study with those gathered from a similar study using freshmen at Joetsu University of Education (JUE) as subjects, reported in a previous survey conducted by the author (HOJO, 1992).

Data was gathered from 76 Japanese freshmen majoring in political science and economics at a large private university located in Tokyo, using a questionnaire; the questionnaire was administered in April of 1991. Data was analyzed by ANOVA and the Wilcoxon's rank sum test.

The results revealed that 1) students felt most anxious when they spoke English, especially when speaking in front of their peers, which was analogous to the results obtained from the freshmen at JUE; 2) students felt least anxious when teachers took the attitude that mistakes were "no big deal," — this was exactly the same result with the data gained from the JUE freshmen and 3) students felt most anxious when "teachers encouraged them to speak English in class," and "teachers praised them,"; one difference was the item that "teachers were patient" showed a slight difference. The private university students in Tokyo felt anxious when teachers behaved this way while the JUE subjects were not as anxious about this aspect of classroom teacher behavior.

* Division of Languages: Department of Foreign Languages